

「当たり前のことについて」

—ちんすこうりな詩集書評

荒木時彦

この詩集には、セックスと、それにまつわる様々な出来事が書かれている。詩集の中で、セックスは、ただ穴に棒をいれてこすだけのことだ、と書かれている詩がある。しかし、もしそれだけのことならば、作者は詩を書く必要はないし、この詩集を編む必要はなかつたろう。作者は、セックスが何なのか、セックスする理由は何なのか、それにまつわる様々な出来事や思いは何なのかを詩として書いている。セックスについての詩の合間に、友人との会話のようなものや、彼氏との別れ、らせん階段について、日常的な風景が挟まれる。それは、地続きのものなのか、対比的に描かれているのか、はっきりとは判断できない。両方が本当であり、両方が嘘であり、両方が同じ平面にあるのかもしれない。今、自分が生きている世界が日常だとするならば、「好き」という気持ちも、「愛してる」という気持ちも、「セックスする」という行為も、日常に過ぎないのだろう。登場人物は、「好き」や「愛」や「セックス」について、わかっているということと、わからないということの間を行ったり来たりしている。突き詰めれば誰にも分らないことなのだから、そのことを正直に書いていると言える。セックスは、全く違うバックボーンを持つ人間同士が一時的ではあれ繋がれる行為の一つだろう。それが、恋愛の延長線上であれ、金銭を介したものであれ、違いはない。しかし、作者は何故、恋愛やセックスに焦点をあてたのだろう。例えば、SNSでの友人とのつながりと、セックスの相手とのつながりに、違いはあるのだろうか。作者は、感情とともに、身体的な感覚を多く語っている。もしかすると、ネットにおけるつながりには、あえて踏み込まず、実際に身体を交わし、感情を交換するというところに焦点を絞ったのかもしれない。感情が描かれ、セックスが描かれる。しかし、そこに、それ以外の日常も描かれる。それらは、同時にありうる世界であり、なによりも登場人物の日常だ。当たり前のことを、当たり前を書くことは難しいが、この詩集ではそれが実現されている。